



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

帰国子女教育の歴史

帰国子女の受け入れを目的として創立された啓明学園が、今年 70 周年を迎えました。学校の歩みを見ていくと、日本の帰国子女教育の歴史が分かります。

◆ 歓迎されない帰国子女

啓明学園の創立者三井高維は、1935 年から家族を伴って英国オックスフォードへ留学しました。帰国したのは 1938 年、世界の中で日本が孤立し、戦争への道を歩んでいる時期でした。三井は、イギリスで教育を受けた子どもたちを通わせる学校がないことに悩みます。それまで帰国子女に門戸を開いていた私立学校でも受け入れを中止するような状況になっていたのです。そこで、私邸を開放して海外勤務者の子弟教育のための学校を創ることを決意します。啓明学園の「創立の趣旨」には、次のような言葉があります。

「帰朝後その国語力の不足、国民常識の欠乏、年齢の超過等の関係から内地小学校に入学の困難を痛感することは海外在勤者の齊しく経験するところであります。これを以て子弟教育のためやむを得ず家族を内地に留め、あるいは帰朝を急ぐ等安んじて永くその業務に服し得ないことは、当人の不幸のみならず邦家のためにも誠に遺憾に堪えないところであります。

かかる特殊児童のために特殊教育機関を設置することは時宜に適せる国家的事業であると考え、取り敢えず尋常小学校を開設し、さらに進んで中・女学校を併設して、一貫教育の理想を実現し、以て父兄の要望に応えたいとの念願から創立されたのが本学園であります。」

世間一般で海外での経験が評価されるような時代ではありませんでしたが、これを「国家的事業」としてやらなければならないと考えたところは三井の見識でしょう。ただ、程度の差こそあれ、海外と行き来する家族の悩みは今も昔も同じと言えるかもしれません。

意外なのは、このような時期にもかかわらず、東京府は特殊学校「啓明学園」を認可していますし、学校の立ち上げには社会的地位の高い人や学識経験者など、たくさんの人が協力していることです。学校の創設を報じる新聞の論調も好意的です。

戦争中も、啓明学園では英語の授業もふくめて普段とあまり変わらない学校生活を送っていたようです。狂言「附子」を英語で上演したときの写真が残っています。世間の風潮や政治の動きにかかわらず、このような教育の必要性を認識していた人たちが陰になり日向になって支えてくれていたのだと思います。

東京が空襲の危険にさらされるようになると、生徒たちは現在啓明学園がある郊外の拝島（はいじま）に学童疎開をします。結局、赤坂にあった最初の校舎は焼失してしまい、学校が都心に戻ることはありませんでした。



疎開児童の宿舎や教室に使われた「北泉寮」